



Title	ノルベルト・エリアスと人間像の問題
Author(s)	内海, 博文
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 291-308
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8034
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ノルベルト・エリ阿斯と人間像の問題

内海 博文

〈要旨〉

一九六九年、ドイツでの『文明化の過程』の再版を契機として、ノルベルト・エリアスの業績は広く社会学という領域において認知され評価されていくことになる。その再版に際して新たに書き下ろされた「序論」のなかで、エリ阿斯は次のような言葉を述べている。「人間像の論究は、何よりもまず文明化過程に関する当研究のより良き理解に役立つものである」。

本稿は、エリ阿斯にとつての人間像の問題の位置と内容を確定するといふ、基礎研究的性格を持つ。本稿で主張されるのは以下のことである。エリ阿斯にとつて「閉じた人 homo clausus」という人間像の問題は、『文明化の過程』の完成を待つて生じてきたものではない。それは、エリ阿斯が自らの研究生活の端緒から取り組みつづけた問題であり、自らの宮廷社会論や「文明化の過程」論といった特徴的な社会認識を創造していくための重要な導きの糸となった問題である。そして、宮廷社会論や「文明化の過程」論の展開を通じて、エリ阿斯が自らの社会認識の基盤として提示することになるのが、「開いた人々 homines aperti」という人間像である。

検討の中心となるテキストは『宮廷社会』(1969)と『文明化の過程』(1966)であるが、人間像の問題がエリ阿斯にとつて重要な問題であるため、本稿でのテキストへの言及は上記の二冊にとどまることなく、エリアスの著書全般にわたることになる。

キーワード

ノルベルト・エリ阿斯、「閉じた人」、「開いた人々」、「宮廷社会」、
『文明化の過程』

はじめに

一九六九年、ドイツにおいて『文明化の過程』が再版される。これを契機にノルベルト・エリアスの業績は、広く社会学という領域において認知され評価されていくことになる。その再版に際して新たに書き下ろされた「序論 Einleitung」のなかで、エリアスは次のような言葉を述べている。「人間像の論究は、何よりもまず文明化過程に関する当研究のより良き理解に役立つものである」(Pflügl, 四二)。¹⁾ この引用に限らず人間像の問題についてのエリアスの言及は多岐にわたって見られる。

本稿は、エリアスの社会認識における人間像の問題の位置と内容を考察するという、基礎研究的性格を持つ²⁾。議論の鍵となる概念は、「開いた人 homo clausus」と「開いた人々 homines aperti」という人間像についてのエリアスの二つの概念である。検討の対象となる中心的テキストは『文明化の過程』(1969)と『宮廷社会』(1969)であるが、人間像の問題がエリアスにとってきわめて重要な問題であるために、本稿でのテキストへの言及は上記の二冊にとどまることなく、エリアスの著書全般にわたることになる。

第一節 『文明化の過程』と人間像の問題

一九三六年、ナチス・ドイツから逃れてすでにロンドンに亡命し

ていたエリアスは、『文明化の過程』の第一巻を書き上げる³⁾。そして第二巻の執筆中であつた一九三八年四月一七日、エリアスはフランクフルト研究所時代に知り合い、当時、エリアスと同じく亡命(亡命先はパリ)していたヴァルター・ベンヤミンに書評を依頼する手紙を送っている。手紙のなかでエリアスは、自らの『文明化の過程』について次のように述べている。「我々の前にはいつそう重要な課題があります。心的構造の歴史的变化についての法則を、我々が理解しうるような形で作り上げることです。この課題への貢献こそが、本書の第一巻が志向しているものです。そうすると我々には、この心的変化の駆動力が社会過程であることを、一步一步探求していくという課題が残されます。まもなく印刷されるであろう第二巻において、この課題は展開されています。しかしあいにく外的な理由のために、それが出版されるにはもう少し時間がかかりそうです」(Schötker 1988)。人間の心的態度の変化と社会過程を同時的に捉えること。まだ十分とはいえないこの自書の概説においてエリアスは、『文明化の過程』の執筆意図を端的に述べている。だが、ベンヤミンによる書評はついに書かれることはなかつた。辛うじて少数部だけ出版された『文明化の過程』もまた、このとき日の目をみることはなかつた。それが実現するのはこの手紙が書かれてから実に三〇年という年月が過ぎた後である。ベンヤミンはもういない。かつて四〇前後であつたエリアスもまた、すでに齢七〇を越えていた。

「しかしあれから三〇年経た今日でも依然として当研究はバイオ

ニアの労作の性格を失つておらず、この問題領域では、当研究のよ
うに経験的次元と理論的次元に同時にまたがる総合的研究の必要性
は、ほとんど当時と変わらない」(PZ:XLV,7)。一九六九年、ドイ
ツにおいて「文明化の過程」が再版される。この引用は、再版に際
して新たに書き下ろされた「序論」におけるエリアスの言葉である。
エリアスが「文明化の過程」において扱った問題領域に対する問題
関心が、エリアス以後の研究において欠けていたというわけではな
い。同様の問題を扱った研究は、その後数多く展開されている。だ
がエリアスによれば、「それらの試みが成功したとは思えない」。で
は「文明化の過程」に対する理解や「文明化の過程」と同様の問題
領域を扱う試みを妨げてきたものは何か。エリアスは、その要点を
以下の二つにまとめている。一つは「発展 Entwicklung」概念をめ
ぐる問題であり、もう一つは人間像をめぐる問題である。

第一の「発展」概念をめぐる問題についてのエリアスの言及は、
『文明化の過程』「序論」に加え、ほぼ同時期に書かれた『社会学と
は何か』(1970) ¹⁾ には「覚書 Norbert Elias über sich selbst」
(1960) において集中的にみられる。そのなかでエリアスは、一八世
紀後半以降において多くの人々が、特定の個人や集団によって意図
や計画されたのではないが、秩序と構造をもった「社会」というイ
メージのもとで自分たちを認識するようになってきたことを指摘す
る。なかでも後の社会学に大きな影響を与えることになったコント
やスペンサー、マルクスといった人々は、その社会認識において長
期的過程の秩序を見出すという課題に取り組むことによって、「発展」

という概念を主張した。こうした人々についてエリアスは次のよう
に言う。「彼らはたとえ多くの言葉を費やしていても次のよ
うなことをおそらく直感したのである。所与の社会の今日の諸問
題や諸構造をただ切り離された現在として近視眼的にまた静的に眺
めるよりも、もし過去という光の中でそれらを眺め、またそれらを
導いてきた長い社会的過程との連関において眺めるならば、大変異
なる様相を帯びるということ」(S:174) ²⁾。しかし二〇世紀に入
り、こうした「発展」概念のもとで示された議論が、事実在即した
観念とイデオロギー的観念の混合物であることが次第に明らかにな
れていく。そして二〇世紀の社会学者たちの大半は、「長期的社会過
程を扱う型の社会学理論に対する極めて先鋭な反動」へと向かい、
社会認識の中心的関心は比較的短期的な現象連関の解明へと移行す
る。エリアスは言う。二〇世紀社会学の方向転換の結果として疑問
視され放棄されることになったのは、「単に一九世紀の社会学の発展
概念のイデオロギー的要素だけでなく、発展概念そのものであり、
……長期的社会発展の問題全般の考究であった」(PZ:XLII,110)。
これに対しエリアスは、自らの社会認識の中心的課題について次の
ように言う。「一九二二—二四年において——今日ではなおさらそう
であるが——私が扱っていたのは人間の歴史のための一種の枠
組みとしての、長期的諸過程に特有の秩序……であった」(S:133) ³⁾。
以上のような「発展」概念をめぐる問題、これが「文明化の過
程」の理解を困難にしてきた理由の一つである。

第二点めが、人間像をめぐる問題である。エリアスは言う。「文明

化の過程を理解するためには、近代の人間像の批判が必要である」(PZLXIV:四八)。エリ阿斯は、従来の社会学において社会認識の前提たる人間像の問題が的確に捉えられてこなかったこと、それが「文明化の過程」への接近を困難にしているもうひとつの問題であるとする。後述するように、エリ阿斯にとって人間像の問題は、「文明化の過程」の完成を待つて生じてきたものではない。それは、エリ阿斯が自らの研究生活の端緒から取り組みつけた問いであり、エリ阿斯にとって「発展」の問題以上に根元的な問題であった。では、エリ阿斯における人間像の問題とはどのようなものだったのだろうか。

第二節 「閉じた人」という人間像の問題

エリ阿斯が、人間像の問題を自らの彫琢した概念を用いて明示的に提示したのは、「文明化の過程」序論とそれに続く「社会学とは何か」という比較的晩年の時期である。だが「文明化の過程」に収録される予定であった論文「諸個人の社会 Die Gesellschaft der Individuen」においても、また「文明化の過程」に先立つ「官廷社会」においても、明らかに人間像の問題は重要な位置を占めている⁶。さらに遡ってエリアスの哲学学位論文「観念と個人——歴史概念の批判的検討——」においても、人間像の問題は顔を覗かせている。

エリアスの自伝的著書『覚書』によるならば、人間像をめぐるエ

リアスの根深い問題意識の源泉はギムナジウム時代に求められるかもしれない。『覚書』のなかでエリ阿斯は、ギムナジウム時代に出会った古代ギリシア・ローマの古典やシラーやゲーテの時代のドイツ古典のことに触れ、こうした幼少・青年期における自らの教養の方向づけを極めて意味深いものであったと述べている(SS:113-115)。「それは人間の諸問題への広くまた深い接近を私に可能にしてくれた一要素であった」。だがこの一文には次のような但し書きが付けられている。「私が徐々に哲学における観念的な傾向の不適切さを認識し始めたときや、私が社会学へと移り徐々にこうした伝統の特殊な人間主義に対して批判的な見解をとり始めたときでさえ」。さらにエリ阿斯は続ける。「私自身の社会学の視座は、この非世俗的伝統やそれによる社会学への紛う事なき影響に対する私の格闘から引き出されてきたように私には思われる」。そして後段においてエリ阿斯は、自らの言うところの「格闘」を次のように言い換えている。「いまなお人間を『閉じた人 homo clausus』として捉える支配的なイメージに対する私の格闘」。前節の最後で述べたことが、ここではエリ阿斯自身の言葉を通じて具体的に語られている。つまりエリアスの社会認識は、多くの社会認識においてしばしば出発点に据えられる「閉じた人」という人間像を問題とすることにより形成されてきたのだと。

エリ阿斯は「閉じた人」という人間像を、人間を「究極的にはすべての他人から絶対的に独立・孤立した完全に自立した存在」(PZLXLVI:三三)と捉える認識であると定義する。この人間像にお

いて人間は、他の人々に対して閉じた存在である。閉じているがゆえに、その知覚・認識や行動において自律性を有する。諸個人は、人々の連鎖構造のなかでの自らの利害を冷静な認識や思考によって判断しつつ、行動を織りなしていく。人間をこうした自律した単数形の孤立的個人として捉える認識、これが「閉じた人」という人間像である⁷⁾。

なぜエリアスは「閉じた人」という人間像を問題にするのか。エリアスは言う。「従来の人間像の特徴のひとつは、人間が自己を個人として、また社会として考察するとき、実際には同一の人間のふたつの異なる局面が問題であるにもかかわらず、言葉や思考においてしばしば、まるでふたつの別々に存在する現象……が問題であるかのように自己を扱っている点である」(PZ:XLIII-XLIV:三二)。エリアスが「閉じた人」という人間像を問題視する理由のひとつは、この人間像が社会認識の問題とセットになったときに明瞭に現れる。諸個人が社会を形成していること、もしくはそれぞれの社会が諸個人の社会であることを疑うものはない。にもかかわらず、思考の上でこの両者の関係を再構成しようとする、往々にして現れてくるのが、「個人」と「社会」という亀裂である。

ここまでであれば、エリアスが問題としている「閉じた人」という人間像は、より一般的に、いわゆる「自律的個人像」といわれている人間像と大いに重複している⁸⁾。しかし同様の問題意識が、同様の帰結を生み出すわけではない。本稿において重要なのは、「閉じた人」という人間像の問題に対するエリアスの接近と展開の仕方である。

ある。

エリアスが「閉じた人」という人間像を見出すのは、単に哲学や社会認識のレベルにおいてのみではない。何よりもまずそれは、日常的な自己経験において深く根を張っている。エリアスが日常に見いだす「閉じた人」の原型とは、自らを他の人々から切り離された孤独な存在であるとすると自己経験である。そこでは、自分だけの知る記憶や経験に満ち溢れた「内面」が実感される。その「内面」における記憶や経験に基づいて人々は、その時々で置かれた状況に適した認識や思考を紡ぎ出す。認識や思考の対象が人間以外の「自然」である場合、それを人間とは切り離された独自の法則性を持つ「外部世界」として知覚される。「社会」もまた同様に「外部世界」として感知されるが、ただしそれが自らと同様に閉ざされた「内面」を持つ諸個人からなるという点で、「自然」とは少し異なる。この相違は、個々の「人間」を認識や思考の直接的な対象とする場合にもつと顕著になる。自らの「内面」における冷静な認識や思考によって生み出される行動は、不可視な「内面」を持つ他の人々の接触のなかで、しばしば無理解や誤解に曝される。本当の自分の姿は他の人々によって十全な形において汲み尽くされ得ないという実感が強まるのである。

こうした実感は、人間がいかなる形にせよ他者に依存しながら存在しているという単純な事実を、脇に追いやるほど強烈なものとしてしばしば感じられる。この自己経験の核心を、エリアスは次のように要約する。「全世界は——したがってまたすべての人間は——

「外界」としてこの「主体」に向かつて対峙しており、他方、主体の「内面」は、目に見えぬ壁によってこの「外界」から——ゆえにまたすべての人間から——隔絶されている（E. S. 8）。「内面」と他の人々を分離するものとしての壁。だがここで壁と感知されているものは何なのか。肉体が、あるいは皮膚が、自らの「内面」を、他の人々から分け隔てる境界線なのか。往々にして他の人々から切り離された「内面」は、あまりに自明のものとして実感され、その実感を生み出している壁が何なのかは吟味されない。

こうした吟味されることのない日常的な実感を源泉として生み出される単数形の「閉じた人」という人間像が、哲学や社会認識の前提として用いられる。その人間像から眺めて説明し難いとされる諸現象は、それらに対して高い価値付与がなされているか否かに関わらず、社会認識の射程外に置かれるか、個々の人々から切り離された集合的現象として説明される。「閉じた人」という人間像の問題における焦点を、エリアスは次のような形で認識論上の人間像の問題へと集約する。「自己経験の真正さを問うことが、重要なのではない。……すなわち問題は、自己経験の中に往々にして直接与えられていると思われるおり、そのうえヨーロッパの思考と言語の伝統に深く根をおろしてきた人間の「内面」と「外部世界」との間の明確な境界線を、その妥当性を批判的・体系的に吟味もせずに、もはやそれ以上説明の余地のない自明の前提として、哲学的認識論・知識論ならびに社会学理論や他の人間科学理論の基礎とすることが、正当かどうかという点である」（PZI: LVI: 四〇）。

こうした問題意識に導かれてエリアスがまず企図したのは、「閉じた人」という人間像に基づいては捉えることの難しい諸現象に取り組みることによって、「閉じた人」という認識上の人間像を動揺させ、人間認識をその呪縛から解き放つことである。このためにエリアスを選び出した舞台、それが「宮廷社会」である。

第三節 宮廷社会論

— エリアスにおける人間認識と社会認識の展開 —

なぜエリアスは、自らの課題を展開するための舞台として、わざわざ宮廷社会という特定の社会を選んだのか。宮廷社会を先の人間像の問題と関連させて理解するならば、この問いに答えることはそれほど難しくない^⑨。

宮廷社会は、フランス革命以後に生きる社会学者——少なくともエリアスの時代の社会学者——においては、研究対象に選ばれることがほとんどなかった。まれに観察の対象にされる場合でもとりわけ注目されるのは、過度に名誉を重んじる態度や威信のために消費を厭わないという態度、家の装飾を厳密に算定するような態度や厳密に規定された儀式や礼儀作法の実践といった、そこに生きる人々の不可解さである。こうしたものを過去の産物として眺めるとき、しばしば人々は次のように問う。「なぜこの宮廷社会の人々は、外面的な事柄に対して少しも超然としなかったのだろうか。なぜ彼らは、彼ら自身が他人の「偽りの振舞い」とみなしていたことに対して、

何らかの外面的特権がほんのわずかでも傷つけられたり脅かされたりすることに対して、さらにごく一般的に言えば、今日われわれがややもすれば非本質的と考えている事柄に対して、それほどまでに神経質になっていたのだろうか、と」(HG143:一四六)。

エリアスは、宮廷社会に対するこうした認識の仕方、「閉じた人」という人間像を見いだす。その人間像に基づいて宮廷社会に生きた人々を眺める限り、宮廷貴族の行為は自律した「自己」を有する人間の行為ではない。それは過度に他の人々の視線を気にし、真に重要とは言えないものに振り回される欺瞞的な振る舞いである。ゆえに不可解なものとして理解の範疇外に置かれる。

これに対しエリアスは言う。確かに今日では宮廷に生きた人々が努力と骨折りに値するとみなしていたものの多くが色褪せてしまったかもしれない。だが彼らにとつてはそうではなかった。宮廷貴族たちが、何をもって自分の存在の意味の充実ないしは意味の喪失だと感じていたかという視点から眺め直すことよつて、宮廷社会はまったく異なる様相を見せる。「ある社会の構造は、その社会を三人称的視点から見ると同時に一人称的視点からも見ることができなければ、理解できない」(HG143:八七)。こうした視点の転換によつて、宮廷社会の諸現象を理解の射程に収めることができるならば、「閉じた人」という人間像に揺さぶりをかけ、ひいては人間像自体を転換させられるかもしれない。こうした意味において宮廷社会は、エリアスにとつて有益な舞台だったのである¹⁰。

では、「宮廷社会」におけるエリアスの議論の骨格はどのようなも

のであるのか。宮廷社会における宮廷貴族は、一種のエリート集団であると同時に、王と上流市民層という上下両面からの圧力に曝された存在である。エリート集団のもつ、他の階層の人々に対して距離を保たねばならないという必要性が、威信付与という点において無比の存在であった王の宮廷に、宮廷貴族を追い込み縛りつけていく。だが宮廷社会における序列は、決して安定したものではない。自らの勢力を、王の愛顧という不安定なものに依存している限り、公的な位階と現実の序列には常に齟齬が生じていく。誰か他の人が現実的に王の愛顧を得ることは、必然的に他の者が不利になることを意味する。宮廷社会の連鎖構造は、恒常的に彼らを序列をめぐる苛烈な競争へと駆り立てていく。位階、世襲的役職、家柄の古さ、金銭、王の愛妾・大臣の愛顧、派閥への所属、武将としての功績、機知、振舞いの洗練度、顔立ちの美しさ、住居の装飾。あらゆるものが序列化闘争の道具となる。なかでも宮廷社会の序列化闘争においてとりわけ重要性を帯びていたのが、礼儀作法の実践である。個人の相対的な序列上の位置は、機会あるごとに礼儀作法を通じて表現される。逆に言えば、礼儀作法によつて表現されなければ、宮廷貴族としての彼らの威信は無に等しい。宮廷貴族にとつて礼儀作法に対する感受性を発達させることは決して外面的なことの重視ではなく、最も必要不可欠なものの重視であった。互いに宮廷社会を織りなしている宮廷貴族たちは、個々人としてはこうした強制に不承不承ながら耐えていたのかもしれない。だが彼らにとつて、宮廷社会に張り巡らされた強制から逃れることは、宮廷貴族であると

いう自己の存在感の根幹、自己の生の意味を放棄することに他ならなかった。こうして宮廷貴族独特の名譽を求め表現するための行動様式が、生産・再生産されていくのである。

宮廷社会に生きる人々を、彼らの繰り広げる闘争を基軸とする連鎖構造のなかで捉えるような人間認識。これがエリアスによる宮廷社会論のひとつの核をなす。この展開を通じてエリアスは、自らの視点を「閉じた人」という単数形の人間像から解き放ち始める。

だが、宮廷社会論がエリアスにもたらしたものはこれだけではない。それはエリアスを、第二節で言及した「発展」の問題へと導いていく。「発展」の問題への言及は、とりわけ「宮廷社会」のほぼ最終章に近い第八章「宮廷化の過程における貴族的ロマン主義の社会発生について」においてみられる¹⁾。先に述べたように宮廷貴族は、「宮廷社会の熾烈な競争において地位と名譽を保持し、嘲笑・軽侮・威信喪失に曝されないために、服装や靴、身のこなし方、言葉遣い、さらには微笑の仕方さえ、要するに自己自身を彼らが出会う相手や状況に相応しく調節していかなければならない。こうした序列化闘争を繰り広げていくなかで宮廷人は、自らを統御する存在となることを強いられていく。この宮廷貴族の自己統御的な行動様式は、やがて彼らの心的態度をも変化させていく。「以前の時代と比較して、今や宮廷では……人間の自発的衝動は、対人関係に際してはるかに抑制されている。考慮、状況の迅速な現状把握、行動路線の測定、要するに省察が、どちらかと言えば情感的自発的行動衝動と言動上実際的行動開始の間に、今や多かれ少なかれ自動的に入り込んで

くる」(HG359-360:三七八)。そして、「この自己統御的な心的態度が、他の人々に対して自律性を有する自らの「内面」という実感を生み出すための壁となる。心的態度における自己統御性は、宮廷社会の連鎖構造におけるそれぞれの状況に応じて、「悟性」とか「理性」の名を与えて肯定的に評価したり、あるいはそれを感情の拘束、障害現象、人間性の墮落とみなしてロマン主義的かつ否定的評価を下されたりする(HG359-360:三七八)。だがいずれにしても、こうした心的態度の変化の渦中にある宮廷貴族にとって、自らの身に生じている変化がどのようなものなのか、そしてそれがいかなる過程のもとに進展しているのかは、明確には意識されない。ここに生み出されるのが、「内面」の存在を人間にとって自明のもの、もしくは永遠の属性であると捉えるような自己経験である。この吟味されることのない日常的な実感を源泉として、エリアスが問題にしてきた哲学や社会認識のレベルにおける「閉じた人」という人間像が、普遍的な人間像としての地位を獲得していく。

宮廷社会論を展開することによってエリアスが得たもうひとつの収穫、それはこれまで自らの社会認識を創造するための対蹠物としてきた「閉じた人」という人間像の生成過程へと接近する手がかりであった。この手がかりを頼りにエリアスの社会認識は、「閉じた人」という認識を生み出すような心的態度の変遷過程が、人間の連鎖構造におけるどのような変遷によって生み出されてきたのかを、より長期的な形で捉えるために駆動し始める。そこに生み出されてくるのが「文明化の過程」である。

だが「文明化の過程」は、「宮廷社会」を単に「発展」させた研究ではない。それは、「宮廷社会」以後のエリアスに拭いがたい刻印を残すことになる、もうひとつの事態に後押しされて生み出される。そしてエリアスの人間像の問題もまた、この事態を転換点として新たな段階を迎える。その事態こそが、ナチスの台頭である。

第四節 「文明化の過程」と「開いた人々」という人間像

— ナチス・ドイツを媒介にして —

ナチス・ドイツと「文明化の過程」の関連を詳細に論じることはここでの課題ではない。だが、それをまったく無視して「文明化の過程」を論じることもまた困難である。ここでは両者の関連のなかでも、エリアスの人間認識にとつてとりわけ重要な一点に限定して考察する。

エリアスは「ドイツ人論」において、ナチス・ドイツと「文明化の過程」との関連を表す次のようなエピソードを記している。「ある学生の奨学金のことで、私は一九三三年にフランクフルトの労働組合会館で会議したことがある。会話がとぎれたとき、私は「武装した連中に攻撃されるとしたら、この労働組合会館で自分を守るためにどういう予防策を講じただろうか？」と尋ねてみた。こう質問すると、みな黙ってしまったのを覚えている。それからやや激しい討論が始まったが、それを見て、参加者の一部の人たちがずっと前から意識の背後になかば隠していた考えを私が述べたのが分かった。

しかしその人たちは、その考えが示唆するさまざまな可能性を口に出そうとはしなかった。なぜなら、それらの可能性は日常生活の調子と大きく食い違っており、日常生活の歩みが終わりがかけている事実を認めるのは恐ろしいことだったからである。そういう出来事はまったく起こるはずがないという声も少しあった。歴史における一種の摂理によって、「理性」と見られるもののほうが反動に対して必ず勝利を収める、というその人たちの確信は揺らがなかった」(SD290-291:116-117)。エリアスが二十世紀前半のドイツにおけるナチの興隆をめぐって着目した問題のひとつ、それはナチスの台頭を眼前にしながらも、ナチの台頭および彼らの主張する大量虐殺の現実化を予見しようとしなかったドイツ内外の人々の認識や思考であった。

なぜヨーロッパの人々は、ナチスの台頭を予見しようとしなかったのか。そもそもそうした行為の現実化を主張していたのがナチスではなく、自分たちが「彼ら」と考える人々——すなわち「我々」の行動様式からは遠く隔たっていると考えられている人々——であったならば、「彼らならやりかねない」と人々は考えるであろうし、それはある形において理解の範疇内に置かれたであろう。しかしヨーロッパの人々にとつてナチを含めたドイツの人々は、「彼ら」というよりも「我々」としてカテゴライズされる、自らと比較的同様の行動様式を備えているはずの人々であった。そうした人々が多分に空想的と思われるユダヤ人殺戮を主張しているからといって、それを実行に移すはずがない。早晚、現実的な利害は空想に妥協を強い、

やがて彼らは自らの問題を多少なりとも自分たちに不利にならぬような形で判断し処理することだろう。こう考えた多くの人々において、大量虐殺の現実化は予期されることはなかった。

このナチスに向けられたドイツ内外の人々の認識の基底にエリアスが見て取ったもの、それは人間性における相違なり変容なりを暗黙には認めつつも、究極的には「理性」的に認識・思考し、行動する存在と捉える認識である。要するにエリアスは、宮廷社会に向けられた視線同様、人間を「閉じた人」として捉える認識をそこに見出したのである。

だがナチスにおいてみられた認識や思考、行動は、なにをもって冷静さを欠いた現実的ではないものとされるのか。こうした反応にはある種の認識・思考、行動に対して、半ば自動的に不快感を抱くような独特の心的態度が作用しているのではないか。その独特の心的態度を、人間にとって普遍的なものとして自明視するところに、ナチスの台頭を看過する認識が生み出されているのではないか。エリアスは、自らがナチスの台頭から導き出した問題を次のように規定する。「つまり私に現れてきた問題は、古代をはるかに凌いでいる人間の基準を表し、それに従って国家社会主義者のような行動、あるいは他の民族におけるそれに類した行動様式に対して自動的に反感を抱く人格構造、特に良心や自己の構造の発展を説明し理解しうるようにするという問題であった」(SDA65一五九)。手がかりは自らの展開した宮廷社会論にある。その「発展」的展開が誘発される。ここに「文明化の過程」が生み出される。

宮廷社会からの廻行によってエリアスが着目したのは、物理的暴力の独占を生み出していく人間の連鎖構造の変容過程である。この暴力独占に基づいて成立するのが、暴力を凍結させた序列化闘争である。この闘争形態の変容を基軸として人々の生活様式は大きく変貌する。時々の序列化闘争の形態に従い、生活の様々な場面において、ある種の衝動や情感を抑制したり隠蔽することが人々に要請される。同時に、ある種の衝動や情感のあからさまな発動や開示は、下等・下品なものとして貶められる。こうした抑制に対する感受性を発達させることは、とりわけ時々の序列化闘争により強度に参加している人々であればあるほど強く要請される。こうした人々であればあるほど、自らをあたかも衝動や情緒に左右されることのない冷静な存在として顕示することが要請される。例えば宮廷社会における宮廷貴族のように。

やがてその抑制は、自己による半ば自動的な統御へと姿を変える。自らにおけるある種の認識や思考、行動に対しては敏感に羞恥心を感知し、他の人々のそれに対しては敏感に不快感を感知するような独特の心的態度が生み出される。だがその時々における自らの心的態度に対する自明視によりその特異性は明確に意識されない。またそれが、どのような独特の連鎖構造の変容過程を経て構成され、支えられているかということも容易に意識にはのほらない。「現在われわれはそのような比較的安定した暴力独占状態とそれに対応した暴力行使のかなり大きな計算可能性にすっかり慣れきっている。その結果それらがわれわれの行動様式や心の構造に及ぼす影響の意味を

ほとんどまだ気づいていない。もし、われわれのなかやまわりにある不安の緊張状態がかわれば、……われわれが「理性」と名づけているもの——かなり長期的視野に立つてわれわれの行動様式を調整し、衝動を押さえつけ、細分化しながら安定させているもの——がいかにか速やかに砕け散り、あるいは崩壊するかを、われわれはまだほとんど意識していない」(PZS:44-45:四六六)。こうした心的態度の変容過程をもってエリアスは、「文明化の過程」と命名する。宮廷社会は、その過程におけるひとつの、そして重要な転機として位置づけられる。

だが「文明化の過程」は、決して人間における衝動や情緒の消滅過程を意味しているのではない。それはあくまで心的態度による半ば自動的な抑制と隠蔽である。この意識されることのない独特の心的態度に基づいて、何が冷静な判断なのか、何が妥当な行動なのか規定されていく。それはしばしば軽やかに「正常性」の装いを纏うことで、理解し難き「異常」なるものを生み出していく¹²⁾。例えばナチスの台頭を予見しようとしなかったヨーロッパの人々の認識に典型的に現れているように。

だがこうした社会認識は何を生み出しているのか。その認識においてはつまるところ、「社会事象としての暴力は、反理性的ではないまでも非理性的とされる領域に追いやられるだけで、実質には不可解なものとしてされているにすぎない」のではないか(SD:293:五五四)。これに対してエリアスは言う。ナチスにみられた大量虐殺をはじめとする様々な出来事を「例外的なものだったのだと考えて自分を慰

めてはならない。探求されねばならないのは、この種の蛮行を助長し、今後も助長しかねない二〇世紀の文明化の状況と、その社会的諸条件なのである」(SD:395-396:三五四)¹³⁾。

こうした社会認識の転換のために必要なのは、他者から隔絶して存在する「内面」という実感から頭の中で距離をとり、自らの心的態度の独自性や、その刻印を帯びた自らの認識や思考の形態、行動の様式を、自らを含めた人々の連鎖構造およびその変容過程のなかで眺め直すような想像力である。こうした想像力を発動するための道具のひとつとしてエリアスが提起するのが、すでに宮廷社会論において萌芽的に企図されていた「閉じた人」という人間像の転換である。

エリアスは自らの提示する人間像を次のように定義する。人間は、「他人との関係において相対的自律性は多少有しているが、決して絶対的自律性を持つことはなく、事実上は一生涯にわたって終始他人に調子を合わせ、他人に頼り切り、他人に依存している存在」(PZ:LVII:五〇)である。人間は自分に起こる様々な出来事を様々な形で経験する。例えば有意義なものや無意味なもの、意味を満たすものや意味を喪失させるものとして。人々がこうした意味をめぐる経験を、いかに他者に対する自律性を有した「内面」におけるものとして実感しようとも、それらはすべて、——最も典型的には言語を媒介させることによって——同時代の人々のみならず、場合によっては過去や未来の人々も含んだ他者にとってどのような意味を持つか、もしくは持っているかと自らが感じるかということに決

定的に依存している。そしてどのような認識や思考、行動が、他の人々にとってどのような意味をもつのかは、自らを含めた諸個人の織りなす連鎖構造、およびそのなかでの位置によって方向づけられ、支えられている。人々の心的態度は、生まれたその瞬間から、この意味の方向づけに敏感に感応しつつ形成される。やがてその心的態度は半ば自動的に作用するものとなっていく。だがこうした心的態度の自動化は、心的態度の恒常的な安定性を保証するものではない。それは人間の織りなす連鎖構造やそのなかでの位置の変化につれて、さらなる変容を促される。ゆえに、その時々における心的態度がいかに普遍性を有しているように思われようとも、それはあくまである連鎖構造においてのみ方向づけられ、構成され、支えられているのである。これがエリアスが『文明化の過程』「序論」において提示した複数形の人間像、「開いた人々 *hominis aperti*」である。

『宮廷社会』と『文明化の過程』という二つの研究を通じてエリアスが彫琢した「開いた人々」という新たな人間像、それは諸個人内水準における人格構造の変容を、諸個人内水準における連鎖構造と関連させて捉えることを可能にする。この人間像のもとに展開されるエリアスの社会認識は、自らが「閉じた人」と名称した人間像の問題、ひいては社会認識における「個人」と「社会」の問題を、その生成という観点から包摂することにより、独特の形で調停へと導いていくのである。『文明化の過程』「序論」において自らの研究を振り返ったエリアスは次のように述べている。そこには、自らの社会認識において人間像の問題という隠された主題が占める重要な

位置について、かつてペンヤミンに語ったときよりも明確に認識していると同時に、それが自らの社会認識にとって持った意義について、過大にでもなく過小にでもなく、慎重に見定めようとするエリアスの姿を見て取ることができるであろう。「当研究には偏見にとらわれぬ人間観察とうまく合致し、それ故に、たとえば文明化の過程ないし国家形成の過程の問題のごとく、古い人間像を基礎にしていては多かれ少なかれ依然として充分に究明し難い問題、もしくはたとえば個人と社会の関係の問題のごとく、古い人間像の立場からはその解決の試みもただいたずらに複雑なだけで、決して説得力のあるものとはなり得ない問題へのアプローチを容易にするような人間像の、少なくとも萌芽だけは見られるであろう」(PFLIXV, 五〇)。

注

(1) 以下、引用は原書の略記号(後掲)とその頁に加え、邦訳の出版されている著書については、邦訳における頁を記載。なお訳文は適宜変更。□内は内海のもの。

(2) エリアスが具体的にどのような契機から人間像の問題に取り組みはじめ、そこから実際にどのような個人史的経過をたどって自らの社会認識を形成していったのかという問題や、歴史的・思想的文脈のなかに、エリアスの社会学的視座の発展を位置づけるといった問題は、本稿の枠を越えた課題である。確かにこの課題に関する手がかりを、いくつか見いだすことはできる。例えば『覚書』には次のような文章がみられる。「学位に向けての研究の過程において、すでに私は思想というものを、人間が現実其他の人々

と共に生活せず、彼らから何も学ぶことなく完全な人間になるとする『知識の主体』という伝統的観念から始めたものでは、人間世界の多岐にわたる側面とそれらの間の関係を頭のなかで把握することはできないと考えていた。私は疑いもなく社会生活自体の私の経験を通じてこの認識へとたどり着いた。例えば戦争においてである。本からの知識がその中心をなしているのではない』(SS131)。だが本稿の課題は、あくまでエリアスにおける特徴的な社会認識と人間像の問題との関連を明らかにすることに限定されている。本稿の幾つかの箇所では、エリアスの各著作の執筆順序およびエリアスの概念の明示された時期が意図的に無視されている。念のため一言。

(3) エリアスの経歴や著書出版の経緯に関する詳細な事情については、Mennell (1989)、Goussliom (1998)、Krieken (1998)、Mennell (1998) を参照のこと。また、エリアスとベンヤミンのやり取りの経緯については、Krieken (1998) において言及されている。

(4) 『発展』の問題に取り組んだ人々についてエリアスは、次のように述べている。彼らは「過去についての社会学的な諸問題を追求したのであり、歴史的な諸問題を追求したのではなかった」ところが「この相違をもちや適切に理解せず、現代という狭く限定された知識と関心をもつ後の世代の人々は、過去の様々な社会構造やより初期の段階にある社会学的な諸問題に対処しようとした関心に対して、『歴史社会学』という名称を与えた。それはしかし、誤った名称である」(SS173-174)。こうした言葉に、エリアス自身の位置づけも見えて取ることができよう。なおこの問題へのエリアスの取り組みにおいて、『発展』の概念に機械的必然性の表象もしくはは目的論的目的追求の表象を結びつける形而上的諸理念とは、

訣別する」ことが意図されていることも付け加えておく (P21; X4)。

(5) 「一九二二—二四年」とは、エリアスがプレスラウ大学の哲学者リヒャルト・ヘーニヒスバルトのもとで、哲学の学位論文「観念と諸個人——歴史概念の批判的検討——Idee und Individuum」を書いていた時期にあたる。その一部は、Goussliom (1998) に収録されている。

(6) 『文明化の過程』と『諸個人の社会』収容の論文「諸個人の社会」の關係について。両テキストは、ほぼ同時期に執筆されている。エリアス自身が言うように、「実際、『諸個人の社会』の草稿は、その本『文明化の過程』の第二巻に含まれている包括的な理論の一部をなす予定であった」。しかし続けてエリアスは次のように述べている。「しばらくの間研究した後、私には次のようなことが明らかになってきた。社会過程に対する個人の關係の問題は、ふたつの主題が密接に関連しているにもかかわらず、文明化についての著書の枠を混乱させる恐れがある」(G210-11)。

それはなぜか。多少、本稿の論点を先取りすることになるが、ここでこの問題について言及しておく必要がある。確かに『文明化の過程』は、「閉じた人」と呼ぶ人間像の生成過程を説明する。しかしそこにひとつの問題がある。それは『文明化の過程』での議論に基づく限り、「閉じた人」という認識から逃れることは容易ではないという障害である。なぜなら、人間の心的態度が自己統御という性格を顕著に示していくことにより生じてきた人間の「内面」という実感は、「自然」を「外部世界」として認識することによって「自然科学」の急激な発達を促進した。そして「社会」もまた、人間の「内面」から切り離された「外部世界」として認識されることによって「社会科学」と言われる学問領域を生み出し

てきたのである。ならばこうした学問領域の発達を促した人間の「内面」と「外部世界」の分離を自明視する自己経験は、「社会」の認識にさいして必要不可欠な自己経験であると言える。にもかかわらずエリアスは、こうした自己認識から生みだされてきた「閉じた人」という人間像が、「社会」の考察を困難にする諸問題を生み出すとするのである。ならばどのようにして「内面」の実感から逃れようとするのか。その実感を——もし可能であるとして——除去したのでは、「社会」をそれ自体の秩序を有したものと捉えることはできない。それらを誤りであると指摘しただけでは、路頭に迷うだけである。人間「社会」を考察するさいの源泉となる一方で、その考察を困難にする諸問題を生み出す源泉をなしてきたという「内面」の二面性は、エリアスが『文明化の過程』において行った研究と密接に関わるとともに、その枠に収まりきらない可能性がある。「閉じた人」という人間像から距離をおくために必要なのは、認識や思考、知識や概念の発達を射程に収めた形で「文明化」論をさらに彫琢することである。それは『文明化の過程』において取りあげた時間枠にとどまらず、より長期にわたる時間軸に沿った考察を必要とする。エリアスにとってこの方向づけを『文明化の過程』の枠内で行うのはまだ時期尚早であると思われるのであろう。これが人間像をめぐる問題が『文明化の過程』から姿を消した理由であると思われる。

そして『文明化の過程』以降におけるエリアスの社会認識の展開は、例えば『参加と距離化』に収められた二編の論文（および二つの「断章」）や『諸個人の社会』に収められた五篇の論文における焦点の推移、「時間について」、シンボル・セオリー *Symbol Theory* とした著書、そして本稿の最後で言及されるエリアス独自の人間像「開いた人々」の提示などとして現れていくことに

なる。特に『参加と距離化』と『時間について』において、エリアスは副題にわざわざ「知識社会学」という名称を用いている。なお、エリアスにおける「知識社会学」に言及しているものとして、日本においては澤井 (1989) がある。

(7) エリアスの「閉じた人」という人間像の問題を、本稿のようにエリアス研究という文脈に囚われることなく、社会思想的・社会的に論じた興味深い研究として、日本では奥村 (1994)、石井 (1998)、海外では Muchembled (1988)、Outram (1989) などがあ

(8) ここに、あくまで本稿の枠を越えた問題が見られる。ドイツ、広くはヨーロッパの知的伝統に対するエリアスの反応は、一九世紀中葉から二〇世紀初頭にかけての思想的文脈との結びつきを無視しては理解することはできない。例えば厚東 (1989) は、この文脈のなかで成立してくる社会学前史、さらには社会学の創設者たちに、孤立的個人像の問題への着目を見出している。

(9) しばしば言われるように、エリアス研究において大きな障害となるのは、それぞれの著書の出版経緯とエリアスによる加筆である。これは『宮廷社会』についてとりわけ当てはまる。『宮廷社会』の原型は、本来エリアスが一九三三年に教授資格論文として書いた「宮廷人——宮廷・宮廷社会・絶対王政の社会学のための論考——」である。だが三〇年後の出版に際して、冒頭の序論「社会学と歴史学」と補筆二篇が加えられただけでなく、おそらく本文の方にも何カ所にもわたる加筆・修正が加えられていると思われる。本稿では、問題設定上、そうした加筆・修正についての厳密な検討が不可欠ではないとの判断に基づき、こうした検討は行っていないことを断っておく。加筆・修正の詳細については、注(一)に挙げた文献を参照のこと。

(10)

こうした問題は、例えば社会認識に文学や芸術などのいわゆる「文化」的領域を取り込もうとする場合に最も先鋭に現れる。こうした説明がたいとされてきた現象へのエリアスの着目に、ハイデルベルク時代の指導教官アルフレート・ヴェーバーとの親近性を見いだすことは無理ではあるまい。エリアスは単に「文明化の過程」という概念をアルフレートから転用しただけでなく、説明したいとされてきた現象への着目もまた引き継いだと言えるかもしれない。

しかし同時にこの相統の内実こそ、両者の社会認識の大きな隔たりが見いだせる。最大の相違は、アルフレートにおける「文明」と「文化」との対置を、エリアスが受け継がなかった点にある。アルフレートは「文明過程」と「文化運動」を区別し、前者を「合目的な、有用な現存形態をいろいろとつくりあげる技術的な手段」における普遍的な発展とし、後者を時代・社会に依る固有性をもった「物的に、精神的に存する現存実態のなかで魂がその都度つくる表現の形態、救いの形態」と規定する。エリアスは、こうしたアルフレートの社会認識について次のように言う。「いまではアルフレート・ヴェーバーの著作において、私達は文化 *Kultur* の概念を見出すことができる。それは事実に基づく議論によって十分補われているが、同時に感情に訴える象徴としての意義をもっており、またそれ自体はトーマス・マンの文化概念と同じ伝統に立っていた」(S. 136)。こうしたアルフレートの「文化」概念に対するエリアスの非共感、のちに「文明化の過程」の第一部「『文明化』と『文化』」という概念の社会発生について(とりわけ第一章「ドイツにおける『文化』と『文明化』の対立の社会発生について」)において発展的に解消されていく。

余談ながら、この両者の相違を考える場合、当然エリアスのユ

ダヤ人たる出自の問題は重要になる。二〇世紀初頭の知識人とユダヤ人という出自の関連の問題はすでに様々に論じられている。だが、まだエリアスについての言及は多くない。数少ない言及者のひとりである *Pravits* (1932) は、エリアスを「反ユダヤ主義のためユダヤのアイデンティティに戻った『出戻りのユダヤ人』」とも称せられる者のリストのなかに並べている。エリアスは生前、自らの政治運動への関わりを否定していたにも関わらず、最近、学生時代のエリアスがシオニズム運動に関わるなかで書かれた論文が発見された (Mennel 1998)。こうしたことを考え合わせると、エリアスとユダヤ人という出自をめぐる問題は、極めて興味深い問題であろう。この問題への先駆的取り組みとして、日本においては坂 (1998) がある。

いずれにせよ、ドイツ人でありながら「文化」と「文明化」との間のドイツ的対置という流れに棹さし、わざわざ「文明化 *Zivilisation*」を自らの研究の中心的概念として用いたエリアスの独自性は、想起されてしかるべき問題である。このドイツ語における「文明化」と「文化」の対置という問題が、エリアスの社会認識において有した重要性については、稿を改めて論じたい。

(11) 本稿では、「宮廷社会」において展開された「発展」の問題を、特に「閉じた人」という認識の生成に限定して論じている。ゆえにここでは第七章「全社会的権力移動の関数としてのフランス宮廷社会の成立と変遷」において展開された「発展」の問題については言及しない。ちなみに、これら「宮廷社会」の第七章と第八章が、それぞれ「文明化の過程」における「国家形成の過程」と「文明化の過程」という議論に繋がっていくと考えられる。

(12) 戦後においても、これと同様の現象が生み出されていく。ナチの帰結として生じた「計画的で冷酷な組織的大量虐殺」という事実

【略記号】本稿で引用・言及したエリアスの著作、およびそれぞれの省略記号は以下のとおり。

ED=Engagement und Distanzierung, 1983, Suhrkamp. (波田節夫・道旗泰三訳)『参加と距離化』法政大学出版社, 一九九一。

ES=Über die Einsamkeit der Sterbenden, 1995, Bibliothek Suhrkamp. (中井美訳)『死にゆく者の孤独』『死にゆく者の孤独』法政大学出版社, 一九九〇。

DZ=Über die Zeit, 1988, Suhrkamp. (井本响二・青木誠之訳)『時間について』法政大学出版社, 一九九六。

GI=Die Gesellschaft der Individuen, 1987, Suhrkamp.

HG=Die hofische Gesellschaft, 1969, Suhrkamp. (波田節夫・中埜芳之・吉田正勝訳)『宮廷社会』法政大学出版社, 一九八一。

PZ1=Über den Prozeß der Zivilisation I: Wandlungen des Verhaltens in den weltlichen Oberschichten des Abendlandes, 1969, Suhrkamp. (赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳)『文明化の過程(上)』ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』法政大学出版社, 一九七七。

PZ2=Über den Prozeß der Zivilisation 2: Wandlungen der Gesellschaft Entwurf zu einer Theorie der Zivilisation, 1969, Suhrkamp. (波田節夫・溝辺敬一・羽田洋・藤平浩之訳)『文明化の過程(下)』社会の変遷』文明化の理論のための見取り図』法政大学出版社, 一九七八。

WS=Was ist Soziologie?, 1970, Juventa. (徳安彰訳)『社会学とは何か』法政大学出版社, 一九九四。

SD=Studien über die Deutschen, 1989, Suhrkamp. (青木隆嘉訳)『ドイツ人論——文明化と暴力——』法政大学出版社, 一九九六。

SS=Norbert Elias über sich selbst, 1990, Suhrkamp.

(13) に直面した人々の多くは次のような問題を生みだした。「二〇世紀の最高のやり方ともいえるべき、合理的というよりも科学的な仕方、昔の粗暴な野蛮への後退とも思われる企てを計画し、それを実行に移すという——人数の違いを無視して、死んだ奴隷にも人間存在の資格を認めるなら、昔のアッシリアやローマならありえたかもしれない——ようなことが、どうして起こりえたのだろうか?」(SD, 394; 三五二)。ナチスがヨーロッパの人々に突きつけた問題、それは単に不快感を呼び起こすようなナチの行った行為そのものの問題ではなかった。それは自分たちと同様と思われていた人々の行為が、自分たちの掲げる行為基準からあまりにかけ離れていたことがはらむ問題であった。それが要請したのは、少なくとも自らの生きる社会がナチに類した人々を生み出しうることを認識することであり、究極的には自らもまたナチに類した行為をなしうると認識することである。だがそれは容易ではない。ここに人々が導き出した説明は、ナチスの行為を自分たちとは違う一部の狂信的な人々——つまり「彼ら」としてカテゴライズされる一部の人々——によって引き起こされた、自らとは無関係な人間にとつての特殊な出来事、「正常」ではない現象であったとする説明であった。「こういう説明は、それに類したことが再び起るとか、そういう野蛮なことは現代産業社会の構造に内在している傾向に由来しているものかもしれないというつらい思いから守ってくれる。それが一種の慰めを与えるのだ」(SD, 395; 三五三)。エリアスにおける「文明化と暴力」の問題については、内海(1998)において筆者の解釈を示している。なお本稿は、先の論文において提示しながらも十分に論ずることのできなかった人間像の問題を、中心に据え直して議論したものである。

参考文献

- Goussblom, Johan and Mennell, Stephen 1998 *The Norbert Elias Reader*. Blackwell.
- 石井潔 1998 『自律から社交へ——新たな主体像を求めて——』、青木書店
- 厚東洋輔 1987 「一八六〇年代と古典古代像の転換」、『年報人間科学』、大阪大学人間科学研究所。
- Krieken, Robert van 1998 *Norbert Elias*, Routledge.
- Mennell, Stephen 1989 *Norbert Elias, Civilization and the Human Self-Image*, Blackwell.
- Mennell, Stephen and Goussblom, Johan. 1998 *On Civilization, Power and Knowledge*, Chicago.
- Muchenbled, Robert 1988 *L'invention de l'homme moderne. Sensibilités, moeurs et comportements collectifs sous l'Ancien Régime*, Fayard. (石井洋二郎訳、『近代人の誕生—フランス民衆社会と習俗の文明化』、筑摩書房、一九九二。)
- 奥村隆 1994 「礼儀作法、個人、社会秩序」、『人文研究』第二三号、千葉大学。
- Outram, Dorinda 1989 'The Body and the French Revolution, Sex, Class and Political Culture', Yale University Press. (高木勇夫訳、『フランス革命と身体——性差・階級・政治文化』、平凡社、一九九三。)
- 坂なつこ 1998 「ノルベルト・エリアスの初期研究——一九二〇年代ドイツを背景に——」、『立命館産業社会論集』第三四号、立命館大学産業社会学会。
- 澤井敦 1995 「マンハイムとエリアス——知識社会学の忘れられた系譜——」、笠原清志・西原和久・宮内正編、『社会構造の探求現実と理論のインターフェイス』、新泉社。
- Schöttker, Detlev 1988 'Norbert Elias und Walter Benjamin. Ein

unbekannter briefwechsel und sein Zusammenhang', *Merkur*, vol. 42: 582-595.

Traverso, Enzo 1992 *Les Juifs et L'Allemagne: de la "symbiose judéo-*

allemande" a la mémoire d'Auschwitz, éditions La Découverte. (宇京

頼三訳、『ユダヤ人とドイツ——「ユダヤ・ドイツの共生」からアウシ

ユヴィッツの記憶まで——』、法政大学出版局、一九九二。)

内海博文 1998 「ノルベルト・エリアスと暴力の問題」、シオロジ、第一

三三三号。

ヴェーバー、アルフレッド 1958 山本新・信太正三・草薙政夫訳、『文化社会

学』、創文社。

(本研究は一九九八年度文部省科学研究費補助金「特別研究員奨励費」による研究成果の一部である。)

Norbert Elias and the Problem of Human-Images

Hirofumi UTSUMI

In 1969, Norbert Elias' "*Über den Prozess der Zivilisation (The Civilizing Process)*" was republished in Germany. It was trigger to acknowledge and reevaluate the works of Elias. In the "Introduction" that was freshly written at this time, Elias said that 'The discussion of this image of man serves in the first place to improve understanding of the ensuing study of the civilizing process'.

This paper mean to be a basic research to determine the position and substance of the problem of human-images in the works of Elias. I insist on following things in this paper. The problem of human-image, that one named 'homo clausus (closed person)', was not considered by Elias after the completion of "*The Civilizing Process*". This was the problem with that Elias has been got from the beginning of his research, and was the clue to create his particular social image as showed in "*The Court Society*" and "*The Civilizing Process*". Through these two works, Elias set up the concept of 'homines aperti (open people)' as the base of his social image.

Key concepts are "homo clausus (closed person)" and "homines aperti (open people)", Elias' concepts about human-images. Though main texts discussed in this paper are "*The Court Society*" and "*The Civilizing Process*", for Elias the problem of Human-Images has been a fundamental one, so we need to refer to others of his works as well.

Key Words

Norbert Elias, 'homo clausus (closed person)', 'homines aperti (open people)', "*The Court Society*", "*The Civilizing Process*"